

科学研究費補助金研究成果報告書

平成22年 4月 4日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2006～2009

課題番号：18520088

研究課題名 (和文) 金刀比羅宮伝来美術の調査と京都画人の研究

研究課題名 (英文) A Study on Art works and Artists in Kotohira-gu shrine

研究代表者 伊藤 大輔

(Daisuke ito)

名古屋大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：00282541

研究成果の概要 (和文)：平成14年度から平成16年度まで金刀比羅宮社務所の依頼によって実施した金刀比羅宮所蔵美術品の悉皆調査を継承し、未紹介作品の調査を行った。その主なものは、狩野尚信筆「唐人物図屏風」、奈良絵本「しゃかの本地」、「扁額縮図」などである。また、展覧会活動を通じて、金刀比羅宮所蔵美術品の一般への普及に努めるとともに、その存在意義について議論を行った。

研究成果の概要 (英文)：This research project follows the comprehensive research for the paintings in Kotohira-gu shrine held from 2002 to 2004. In this research project, I examined some paintings which have not been published so far such as “The screen of Chinese figures” by Kano Naonobu, “Shaka no Honji” and “Sketch Books of Votive Picture Tablets(Hengaku Shukuzu).”

I also helped the organizers of the Exhibition concerning the art of Kotohira-gu shrine as an academic advisor.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1300000	0	1300000
2007年度	800000	240000	1040000
2008年度	700000	210000	910000
2009年度	500000	150000	650000
年度			
総計	3300000	600000	3900000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：美術史

1. 研究開始当初の背景

金刀比羅宮の美術品は、江戸初期から収集が始まり、江戸時代中期の伊藤若冲、円山応挙の障壁画を得、その後岸岱一派による大規模な障壁画の修繕を経て、幕末に一応その形を成した。

明治初期の廃仏毀釈の波を受けて、仏教関係の美術品は、消失もしくは売却の憂き目をみたらしいが、神社として再生してゆく中で、積極的に地域の文化的パトロンとしての役割を果たさんとして、明治初期にはこと琴平山博覧会を開催するなどして、美術品の収集

は一層の充実を見た。その時期の収集品としては、二十点以上にわたる高橋由一作品の存在が特筆される。

このように、明治初期までは金刀比羅宮は時代の先端に行く洋画作品にも惜しみない支援を行っていたが、その後いつしか文化財との関わりはうすくなり、美術品はほとんど増減することもなく、ひっそりと守り伝えられるにとどまっていた。

しかし、平成16年に三十三年に一度行われる大遷座祭を迎えるに当たって、金刀比羅宮では、金刀比羅宮再生計画を立ち上げ、その一環として、現存美術品の悉皆調査を行うことになった。

それは平成14年度から16年度の2年間に渡って、金刀比羅宮社務所の依頼を受けた当研究代表者が、同社務所の支援を受けて独自に行われた。本研究は、その悉皆調査を継承発展させるものとして計画された。

件の悉皆調査は平成16年の金刀比羅宮における大遷座祭の際に研究図録の出版という形で一定の成果を得た。しかし、金刀比羅宮社務所が推進する再生計画が進展するにつれ、当初の調査では知ることのできなかつた未調査の作品が同宮の各所より発見されるに至った。このため、図録の補遺を目指して再調査を行い、金刀比羅宮の美術に関する知識をいっそう充実させることが求められていた。

2. 研究の目的

上述のように、平成16年の金刀比羅宮における大遷座祭の際に出版した所蔵品図録に漏れた作品の調査を行い、所蔵品図録の補遺を行うとともに、金刀比羅宮の美術に関する知識のいっそうの充実を図ることを大きな目的とした。

また、調査のみでなく、金刀比羅宮の美術品の美術史的意義について考察し、明治初期からほとんど移動の無いタイムカプセルのようなコレクションの歴史的意義を明らかにすることも目的とした。

これにより、近年美術史学の中でも主要な研究ジャンルを形成しているコレクション史的な観点から、金刀比羅宮の美術品を意義づけることを心がけた。

この点は、どうしても個別作品の解説に偏りがちであった前記所蔵品図録では十分になしえなかった総括的な議論であり、そのような意味からも、前記所蔵品図録を補遺することを目的とした。

以上のように、様式論によるテキスト内的研究、コレクション史的観点によるテキスト外的研究の双方に目配りを行い、金刀比羅宮の美術品について、美術史的な意義を相対的に明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

美術品の調査が主体であるので、特別な方法があるわけではない。現地に赴き、明治より蓄積された所蔵品台帳を総覧しつつ、未調査作品を抽出するとともに、実際の作品の所在を探索してゆく地道な作業を重ねた。また、台帳に不記載の作品もあり得ることを想定し、社務所の関係者にインタビューを行って、未調査作品の発見に努めた。

調査は通常の作品調査に則り、作品のデータを採取するとともに、時間をかけて熟覧し、作品の特徴の把握に努めるとともに、写真撮影を行って現状の記録を行った。

調査で発見した作品については、作品解説を記すべく、関連論文の収集などの準備を行った。

以上を踏まえて、金刀比羅宮コレクションの意義について考察するために、資料の整理や論文収集などの作業を行った。

4. 研究成果

各年度において金刀比羅宮が所蔵する美術品の調査をすすめて、これまでに、金刀比羅宮の所蔵品台帳に記載されていない作品も含め10点弱の作品を新たに発見し調査することが出来た。以下主要なものについて若干の説明を加えたい。

まず狩野尚信筆の「唐人物図屏風」は彼が、二十九歳の時に描いたとする落款が入れており、夭折した尚信の最初期作品として位置づけられるものである。作品の状態に若干の疑問があることから、今後のさらなる作品研究が不可欠であるが、この作品の出現は江戸狩野研究に大きなインパクトを与えるものと思われる。

次に注目されるのは奈良絵本「しゃかの本地」である。この作品は、極彩色の丹精された画質を持つ上手の作品である。西尾市岩瀬文庫蔵本など他の類例との比較研究などによって、奈良絵本研究を進展させるに十分な質を持っているものと思われる。

近年の美術史は、純粋美術的な作品史だけではない、多彩な分析視点をとっているが、金刀比羅宮の美術に関しては、コレクション史的な視点からも興味深い資料が存在している。それが「扁額縮図」である。

これは金刀比羅宮に奉納された絵馬や扁額を幕末の文久年間(1861~1864)に記録したもので、丁度江戸時代全体を通じた金毘羅信仰の様相を視覚資料を通じてまとまって見せてくれる重要な資料であると言える。コレクション形成における地域的・階層的広がりの様子を見渡すこともでき興味深い。この資料については、全八冊の調査を終了した。

以下煩雑を避け、その中の絵画資料についてのみ抜粋して記載する。

(1) 題箋「金」

- ・ 桜花武者図 鍋島十郎左右衛門藤原紀義筆
- ・ 大物浦図
- ・ 若武者と老武士像
- ・ 金地墨画虎図 岡岷山筆
- ・ 唐武人と唐美人と赤子の図 法橋関月門人西讃亀府横山関雪筆
- ・ 神主図 □峯斎守嗣筆
- ・ 秦武王妃海上遇賊図 森樵眠敬画
- ・ 黒馬図 「文波」印
- ・ 唐子二股大根図
- ・ 亀図 筑前福岡井上中画
- ・ 猩々図
- ・ 金毘羅大権現図
- ・ 笛吹図 「蘭谷」印

(2) 題箋「石」

- ・ 大津石場舟場之図
- ・ 巖島図 林常信
- ・ 高砂図
- ・ 蒙古襲来図 (右)
- ・ 蒙古襲来図 (中)
- ・ 蒙古襲来図 (左)
- ・ 墨龍図 周達筆
- ・ 駒牽図 狩野洞春英信筆
- ・ 童子列黄説項羽図 月岡雪斎筆
- ・ 錦帯橋図 白峯斎筆
- ・ 桜花武者図 養澤惟豊謹画
- ・ 高野山金剛峯寺青巖寺の上門図
- ・ 金泥龍図

(3) 題箋「絲」

- ・ 猪に武人図
- ・ 双孔雀図
- ・ 双蟹図
- ・ 鷺図 森一鳳筆 嘉永元戊申六月吉日 対馬殿御寄附
- ・ 難船図
- ・ 牛若丸図 南峰筆
- ・ 駒牽図 長府 文流斎林美彦
- ・ 六歌仙図
- ・ 武士図
- ・ 翁舞図 光年筆
- ・ 正面の墨馬 石東山画 「石垣之印」「鹿角東山」印
- ・ 武士図
- ・ 馬図
- ・ 島に御神体
- ・ 中国武将図 浪華法橋周峯筆
- ・ 白象図
- ・ 白馬図 伝云大石内蔵之助良雄自画而献于此
- ・ 鷺と狸図
- ・ 墨馬図 岸岱筆
- ・ 駒牽図 蔵人所衆従五位下行式部少丞菅原朝臣為恭

- ・ 武将熊退治図
- ・ 黒馬図 狩野友徳筆
- ・ 親子鶏図
- ・ 一寸法師と天狗図
- ・ 鍾馗と鬼図
- ・ 水練図 (水難図?)
- ・ 鍾馗と鬼図 山本雲溪筆

(4) 題箋「竹」

- ・ 牡丹孔雀図
- ・ 捕鯨図 川田維鶴筆
- ・ 柳に燕図
- ・ 天狗と子供
- ・ 武士異人襲撃図
- ・ 虎三頭 拱陽九峰筆
- ・ 羅陵王図 谷文晁筆
- ・ 溺れた女性を救助する図
- ・ 鎧の胸を射る図 春川甫政筆
- ・ 翁舞図 光年図
- ・ 中国故事人物図 尾形洞霄筆
- ・ 松鷹図
- ・ 恵比寿図 画工表具丈四郎
- ・ 真景図 (右半) 勝義写
- ・ 真景図 (左半)
- ・ 中国武将図 法橋関月筆
- ・ 唐獅子親子図

(5) 題箋「匏」

- ・ 橋上武人図 (張飛) 安政二歳乙卯晩春 山本雲溪
- ・ 波馬唐人物図 (劉備) 安政二歳乙卯晩春 山本雲溪
- ・ 馬上武人図 (関羽) 安政二歳乙卯晩春 山本雲溪
- ・ 六歌仙図
- ・ 松に鷹図 藤原惇晴画
- ・ 白衣僧図 万延二辛酉年正月 下総国千葉郡馬加村重五郎
- ・ 墨龍図 戊寅中夏写 同功館越前介岸駒文政元年戊寅 九月十日
- ・ 難船図
- ・ 白象図 東溪亀載薰沐写
- ・ 魯恭馴雉之図 赤馬市隠梅圃画
- ・ 児島高德図 菊池容斎筆
- ・ 黒馬図 「蘭石」印
- ・ 中国武人 (関羽?) 図
- ・ 三番叟図 (?)

(6) 題箋無し (「土」か?)

- ・ 猿図 森狙仙筆
- ・ 雪中母子図 (常盤御前?) 吉村公圭筆
- ・ 馬図
- ・ 出島オランダ船図 荒木直忠画
- ・ 源氏物語図 土佐光信筆
- ・ 墨龍図 山本信厚筆
- ・ 双孔雀図 松浦春挙筆
- ・ 虎図

- ・雪中母子図（常盤御前？）ぎおんせいとく
- ・老人が海中に宝珠を捧げる図 北窓翁英圭筆
- ・雅楽図
- ・墨馬図
- ・中国武人図 峰山重春筆
- ・双鶴図 山齊藤敏筆
- ・祇園絵之図
- ・馬図
- ・黒馬図 岩井宗雪筆
- ・立花図
- ・鶴図 光年筆
- ・中国武人図 芳梅筆
- ・難船人物図
- ・金毘羅参り図 大海筆
- ・双武人図 仲野玉秀在敏画
- ・駒牽図
- ・白象図
- ・松鷹図 肥後雪舟末流矢野安良筆
- ・六歌仙図
- ・白馬に翁図 芳園筆

(7) 題箋「革」

- ・人丸
- ・凡河内躬恒
- ・中納言家持
- ・在原業平朝臣
- ・素性法師
- ・猿丸大夫
- ・中納言兼輔
- ・権中納言敦忠
- ・源公忠朝臣
- ・斎宮女御
- ・源宗子朝臣
- ・藤原敏行朝臣
- ・藤原清正
- ・藤原興風
- ・坂上是則
- ・小大君
- ・大中臣能宣朝臣
- ・平兼盛

(8) 題箋「木」

- ・紀貫之
- ・伊勢
- ・山辺赤人
- ・僧正遍昭
- ・紀友則
- ・小野小町
- ・中納言朝忠
- ・藤原高光
- ・壬生忠岑
- ・大中臣頼基朝臣
- ・源重之
- ・信明朝臣
- ・源順

- ・清原元輔
- ・藤原元真
- ・平仲文
- ・壬生忠見
- ・中務

以上が、今回の調査で判明した『扁額縮図』内の絵画資料の全容である。

また上述のような調査を進める一方で、これと並行して、金刀比羅宮の美術品を広く一般に公開するための展覧会活動にも関わった。特に、平成19年7月から平成20年6月まで東京藝術大学美術館、金刀比羅宮、三重県立美術館の三館を巡回した「金刀比羅宮書院の美」展においては一定の研究成果を図録を通じて示すことが出来た。また、平成20年10月15日から12月8日までパリのギメ東洋美術館で開催された「こんぴらさん 海の聖域」展に関わって、これまでの研究成果を海外に示すことが出来た。

同様に、これまでの研究成果を踏まえて名古屋大学と陝西師範大学共催の国際シンポジウムにおいて金刀比羅宮表書院の円山応挙障壁画群の東アジア的特異性について西洋と対比しながら論証した。これは、金刀比羅宮の所蔵品研究の総括的視点を与えるものと自己評価している。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2件）

- ①伊藤大輔「金刀比羅宮の信仰と絵画」（『国華』1334号、2006年、19～26頁、査読有）。
- ②伊藤大輔「狩野探幽筆『山水図』（『国華』1334号、2006年、27～29頁、査読有）。

〔学会発表〕（計 1件）

- ①伊藤大輔「十八世紀日本の障壁画空間—讃岐金刀比羅宮表書院の円山応挙障壁画を中心に」（名古屋大学文学研究科・陝西師範大学共催国際シンポジウム『人文学研究方法の現状と展望—現地調査（Field Work）を中心に—』、2008年11月22日）於名古屋大学大学院文学研究科。

〔図書〕（計 2件）

- ①田窪恭治監修・伊藤大輔主要作品解説「こんぴらさん 海の聖域」展図録（金刀比羅宮、2008年、総頁数394頁、担当分273-281頁370-372頁）。
- ②田窪恭治監修・伊藤大輔主要作品解説「金刀比羅宮書院の美」展図録（朝日新聞社、2007

年、総頁数 263 頁、担当分 217-227 頁)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 大輔 (Daisuke Ito)

名古屋大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：00282541